

## 形態論講演会

ヨーロッパから形態論分野の著名な研究者を招いて講演会を開催します。

講演：

1. Geert Booij (University of Leiden)  
“Pseudo-incorporation in Dutch, and its implications for modeling the grammar”
2. Sergio Scalise (University of Bologna)  
“Headedness and headedless in compounding”
3. Angela Ralli (University of Patras)  
“Ways of interaction between derivation and compounding”

日時：2008年6月20日（金）13:00～17:00

場所：東京大学駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム1

[http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam02\\_01\\_17\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam02_01_17_j.html)

使用言語：英語

この講演会は、6月22日（日）に学習院大学で開催される日本言語学会のシンポジウムとは内容が異なりますので、興味のある方はぜひご参加ください。どなたも参加はご自由です。

なお、講演会終了後に講師の先生方を交えて簡単な懇親会を予定しています。参加ご希望の方は、準備の都合上、6月13日までに伊藤たかね（東京大学）(ito[アット]boz.c.u-tokyo.ac.jp)までご連絡ください。その際、メールの件名は「MLF party」でお願いします。追って会場等のご案内を差し上げます。

本講演会についてご不明の点は、小野尚之（東北大学）(nono[アット]intcul.tohoku.ac.jp)までお訊ねください。

# **Morphology and Lexicon Forum 2008**

**MLF2008**

**要旨集**

2008 年 7 月 5 日 (土)、7 月 6 日 (日)

**神戸大学**

## Morphology and Lexicon Forum 2008 (MLF2008) プログラム

2008年7月5日(土)、7月6日(日)

神戸大学瀧川記念学術交流会館2階大会議室

会場の案内: <http://www.kobe-u.ac.jp/info/access/rokko/bun-ri-nou.htm#themap>

参加費: 無料 どなたも自由にご参加ください。

7月5日(土)				
受付 1:30				
1	2:00-2:45	桑名保智	札幌大学非常勤講師	英語複合名詞における発話速度:複数接辞の位置とピッチの高さ
2	2:50-3:35	時崎久夫 桑名保智	札幌大学	句複合語と有標語順
休憩				
3	3:45-4:30	日高俊夫	摂南大学非常勤講師	日本語の語彙的複合動詞の語形成過程
4	4:35-5:20	浅尾仁彦	京都大学大学院	構文形態論による日本語動詞複合語の記述
懇親会 5:30-7:30 (瀧川記念学術交流会館1階レストラン)				

7月6日(日)				
5	10:00-10:45	和田学	山口大学	韓国語受動文と語彙概念構造
6	10:50-11:35	長南一豪	獨協大学大学院	インドネシア語形容詞派生動詞の語彙概念構造とVP殻構造
昼食*				
講演	1:30-2:40	上原聡	東北大学	認知形態論の基本的考え方紹介:用法基盤モデルにおける語形成
休憩				
8	2:50-3:35	小竹直子 酒井弘	広島大学大学院・広島大学	形態的に対応する感情動詞と感情形容詞の使い分け—「悲しんだ」と「悲しくなった」のアスペクト性を手がかりとして
9	3:40-4:25	小林真由美	津田塾大学大学院	軽動詞構文のLCSと項構造

\*日曜日の昼食は各自でご用意ください。

### 懇親会のご案内

会場: 瀧川記念学術交流会館1階レストラン

時間: 7月5日(土)午後5:30-7:30

会費: 一般5,000円、学生2,000円

参加をご希望される方は、準備の都合上、小野 ([nono@intcul.tohoku.ac.jp](mailto:nono@intcul.tohoku.ac.jp)) 宛てに6月30日までにメールでご連絡ください。その際、件名は「MLF party」でお願いします。

英語複合名詞における発話速度：

複数接辞の位置とピッチの高さ

桑名 保智 (札幌大学 非常勤講師)

y\_kuwana@edu.sapporo-u.ac.jp

本発表では、英語複合名詞が複数化された時のピッチと発話速度を計測し、複数接辞の位置とピッチの高さは発話速度と関連があるというデータを観察する。そして、それは発話速度が速くなると複合名詞内の境界が認識されないからであるということを示す。

英語複合名詞の一般的な音韻的特徴として、以下の(1a)が示す通り、第一強勢が第一要素に、第二強勢が第二要素以降に置かれるということが挙げられる。また、(1a)のような複合名詞の形態的特徴としては、複数化された場合、一般的には(1b)のように複数接辞が第一要素に現れるが、(1c)のように最後の要素に現れ得るということが知られている(竝木 1985)。

(1) a. s<sup>ón</sup>-in-làw

b. sons-in-law

c. son-in-laws

本研究では、(1b)と(1c)のように複数接辞の位置が異なる複合名詞のピッチと発話持続時間を計測した。具体的な方法としては、音声検索エンジン *Everyzing* を使い、自然な発話における両タイプの複合名詞(*sons-in-law* と *son-in-laws*) をそれぞれ 28 個インターネット上から収集した。そして、音声分析ソフト *Praat* で両複合名詞の第一要素(son/s)・第二要素(in)・第三要素(law/s)のピッチを計測し、それらの要素間のピッチの推移を計算した。また、複合名詞が発せられる持続時間を計測した。その結果は(2a-b)の表 1・2 と(3)の図 1 に示されている。

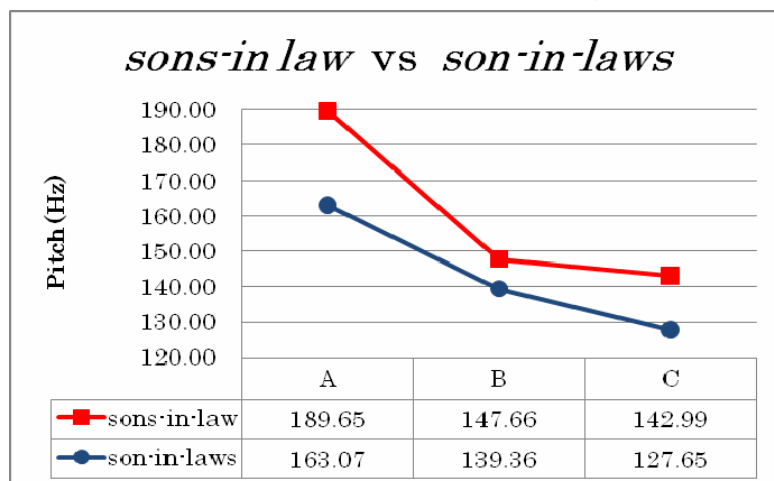
(2) a. 表 1. *sons-in-law* のピッチ(Hz)とその発話持続時間(秒)

	A	B	C	持続時間	ピッチの推移		
	son	in	law		A-B	B-C	A-C
1	195.71	148.83	117.53	0.90	46.83	31.3	78.18
2	207.45	163.35	158.68	0.80	44.1	4.67	48.77
...	...	...	...	...	...	...	...
28	154.30	123.66	110.06	0.89	30.64	13.60	44.24
平均	189.65	147.66	142.99	0.81	41.99	4.66	46.65

b. 表 2. *son-in-laws* のピッチ(Hz)とその発話持続時間(秒)

	A	B	C	持続時間	ピッチの推移		
	son	in	law		A-B	B-C	A-C
1	148.77	143.99	118.17	0.61	4.78	25.82	30.60
2	150.26	168.40	146.24	0.61	-18.14	22.16	4.02
...	...	...	...	...	...	...	...
28	132.80	112.28	110.92	0.77	20.52	1.36	21.88
平均	163.07	139.36	127.65	0.68	23.71	11.72	35.42

(3) 図 1. *sons-in-law* と *son-in-laws* の比較



両者間に統計的な有意差が確認されたのは次の4つである。第一要素のピッチの高さ( $t(54)=2.37, P<.05$ )、第三要素のピッチの高さ( $t(54)=1.69, P<.05$ )、第一・第二要素間のピッチの推移( $t(54)=2.10, P<0.5$ )、そして複合名詞全体の発話持続時間の長さ( $t(54)=3.46, P<.01$ )であった。すなわち、*sons-in-law*の第一要素と第三要素は*son-in-laws*のそれらよりもピッチが高く、その複合名詞全体の発話持続時間が長かった(つまり、発話速度が遅かった)。

問題の複合名詞における複数接辞の位置、各要素のピッチの高さ、複合名詞全体の発話速度の関係はTokizaki(1999b, 2008)のBoundary Deletionにより次のように説明できる。本研究の*sons-in-law*のように発話速度が遅い場合、複合名詞内の境界が認識されるため、第一要素の後ろに複数接辞が挿入される。また、同じ理由で強勢は、一般的な複合名詞のパターンに従い、第一強勢は第一要素に、第二強勢は第二要素以降に付与される。逆に、*son-in-laws*のように発話速度が速い場合、複合名詞内の境界が認識されなくなるため、複数接辞を第一要素の後ろに挿入できずに最後の要素につけられる。また、発話速度が速くて複合名詞内の境界が認識されずに一語のようにになっているため、複合名詞に典型的な第二強勢の付与がされない。

(4) a. *sons-in-law*

[[son][[in][law]]] > //son//in//law// > sóns-in-làw

b. *son-in-laws*

[[son][[in][law]]] > //son//in//law// > /son//in//law// > sòn-in-laws

以上のように、本発表は、英語複合名詞における形態的・音韻的現象が発話速度と関連があり、それは発話速度が複合名詞内の境界の認識に影響を与えるためだと述べる。

参考文献

竝木崇康. 1985. 「語形成」『新英文法選書(第2巻)』東京：大修館書店。

Tokizaki, Hisao. 1999b. Prosodic phrasing and bare phrase structure.

*Proceedings of the North East Linguistic Society, Volume one*, 381-395.  
GLSA, University of Massachusetts, Amherst.

Tokizaki, Hisao. 2008. *Syntactic Structure and Silence: a Minimalist Theory of Syntax-Phonology Interface*. Tokyo: Hituzi Syobo Publishing.

句複合語と有標語順  
時崎久夫・桑名保智(札幌大学)  
toki@sapporo-u.ac.jp

本発表では、句複合語(phrasal compound)が、Holmberg (2000)の Final-Over-Final Constraint (FOFC)に違反する句に近似すること、またどちらも特定の言語で容認されることを指摘する。そして、ある言語が FOFC に違反する語順の句を容認するならば、句複合語も許すという言語類型論的普遍性を提案する。さらに、この一般化がなぜ成り立つのかを、生成文法の枠組みで、補部が指定辞位置へ移動して主要部に音韻的に編入し、複合語的なまとまりを作るといふ議論を通して考察する。

句複合語は、語の内部に句を含む  $[_N [_{PP} \text{over} [_{NP} \text{the fence}]] \text{gossip}]$  のような構造を持つが、これは Holmberg (2000)の、諸言語に存在しない句の語順を説明する制約 FOFC(句  $\alpha P$  が主要部先端 (head-initial) ならば、 $\alpha P$  を直接支配する句  $\beta P$  も主要部先端である) が禁ずる構造  $*[_{\beta P} [_{\alpha P} \alpha \gamma P] \beta]$  と近似している(上記の例では、 $\alpha = P, \beta = N, \gamma = N$ , ただし  $\beta P = \beta = N$  と考える)。

本研究が注目するのは、句複合語が、語は句を含まないという制約 No Phrase Constraint (NPC) (Botha 1984, Lieber 1992) に違反しながらも、特定の言語で許されること、そして FOFC が禁ずる句の語順も、実際には特定の言語で許されること、さらに FOFC 違反の語順の句を許す言語(ドイツ語・オランダ語など)は、句複合語も許す(逆は成り立たない)ことである。

まず、Kayne (1994) に従い、諸言語の基底語順を主要部・補部  $[X YP]$  とし、補部・主要部の語順は、補部が指定辞位置へ移動して派生され、膠着的になると仮定する(cf. Julien 2002)。本研究は、移動のできる  $[YP [X t]]$  が膠着的になるのは、音韻的に  $[YP X]$  という左枝分かれ構造となり、補部が主要部に音韻的に編入した複合語的なまとまり  $YP-X$  を作るためであると論じる。

すると、日本語のような主要部末端 (head-final) 言語は語から句のレベルまで小さい範疇から階層順に、補部が移動し主部に音韻的に編入をすることになる。しかし句複合語では、含まれる句のレベルで補部の移動・編入が起こらないのに、それを支配する語のレベルで、その句の移動・編入が起きて  $[_Z [_{XP} X YP]-Z]$  という構造を作っている。

これは語レベルの有標な編入であるが、ドイツ語などでは、より大きな句のレベルで  $[_{VP} [_{PP} \text{nach Berlin}] \text{gehen}]$  (go to Berlin) などの  $[_{ZP} [_{XP} X YP]-Z]$  という、さらに有標な編入による複合語的構造を作っていることになる。これが句レベルに適用する FOFC の違反であり、これを許す言語が、より小さな語レベルに適用する NPC の違反を許して句複合語を持つのは当然のことと考えられる。よって、ある言語が FOFC に違反する語順の句を許すなら、句複合語も許すという一般化が成り立つものと考ええる。

言語のどういう特徴が、句複合語や FOFC 違反の語順を許すのかについては、強勢の位置などの可能性を考えているが、現段階では、よくわかっていない。また、句複合語を許す言語は他に何かがあるかについても検討が不十分である。今回の発表で参加者からの助言を仰ぎたいと考える。

(1,396 字)

# 日本語の語彙的複合動詞の語形成過程

日高俊夫

(摂南大学非常勤)

e-mail: aig38901@bca.bai.ne.jp

日本語のいわゆる語彙的複合動詞の語形成については、これまで概ね影山(1993)の次の主張に基づく路線で分析が精密化されてきたと言えるだろう(松本(1998), 由本(2005)等)。

(1) 男が木を切り倒した。

a. [x CUT y] CAUSE [x CAUSE [y FALL]]

b. [x CUT y] CAUSE [y FALL] → 中国語(打死)、英語(strike him dead)

c. x CAUSE [y FALL] by x CUTTING y → 日本語(切り倒す)

(2) (1b)は「男が木を切り、その結果、木が倒れる」という意味を表し、この意味構造は結果状態を表すのに自動詞表現を用いる中国語「打死」や英語“strike him dead”の場合にはうまく適合する。しかし日本語の場合はV2が自動詞(\*切り倒れる)ではなく他動詞(切り倒す)であるから、(1b)は日本語の姿を正しく映し出した語彙概念構造とは言えない。最後の(1c)の構造は「木を切ることによってその木を倒す」という手段ないし様態を表し、これは日本語の観点から筋が通っている。(影山 1993: 116 (番号は発表者))

確かに(1a)や(1b)は日本語の姿を正しく表示していない。しかし、だからといってそれが直ちに(1c)を正当化する理由にはならないのではないだろうか。本発表では、これまで「語彙的複合動詞」として一枚岩で扱われてきたものにも、LCSのみのレベルで形成されるものと特質構造の主体役割に基づいて形成されるものがあることを主張し、次の3つの語彙的複合動詞の語形成過程を提案する。また、そのメカニズムに基づけば、先行研究のメカニズムでは説明できないと思われる現象について、妥当な説明が可能になるということを示す。

(3) a. LCSの単一融合化によるもの (Jackendoff (1974)のComplex Predicate Ruleに相当)。

覆い隠す、噛み付く、切り倒す、漕ぎ進む、ころげ回る、嘆き悲しむ、這い寄る、運び去る etc.

b. V2のLCSの特質構造(Pustejovsky 1995)の主体役割とV1のLCSの対応解釈によるもの。

言い負かす、言い寄る、(船が)漕ぎつく、泣き腫らす、飲み疲れる、持ち上げる etc.

c. V1がV2のLCSの移動に関わる様態として付加されるもの。

持ち運ぶ、持ち去る、持ち寄る、飲み歩く、買い回る etc.

(3)のそれぞれのプロセスは対等に存在しているのではなく、語彙的複合動詞を形成するためにはまず(3a)のプロセスが優先し、それが不可能である場合に(3b)や(3c)のプロセスが採られる((3b)と(3c)は対等であると思われる)。

(3)のメカニズムを仮定することにより、次のような現象が説明できる。

(3) a. 宝を覆い隠す。

b. 宝を部屋に隠す。

c. \*宝を部屋に覆い隠す。

(3a)に従えば、「覆い隠す」のLCSは次のようなものであると考えられる。

(4) a. 隠す [x CAUSE [y BECOME [y BE-AT [PLACE]<sub>SECRET</sub>]]]

b. 覆う [ $\alpha$  CAUSE [ $\beta$  BECOME [ $\beta$  BE-AT [UNDER COVER]]]]

c. 覆い隠す [x  $\alpha$  CAUSE [y  $\beta$  BECOME [y  $\beta$  BE-AT [UNDER COVER]]]]

(20a)と(20b)を融合させてできたものが(20c)であり、そこでは「隠し場所が覆いの下である」という記述になっており、新たな場所項の入る余地はない。このため(3c)の表現は容認されないものと

考えられる。一方、先行研究（由本 2005）のメカニズムに基づけば「覆い隠す」は次のように分析されると考えられる。

- (4)  $\left[ \begin{array}{l} [x_i \text{ CAUSE } [y_j \text{ BECOME } [y \text{ BE-AT } z \text{ SECRET}]]] \\ \text{BY } [\alpha_i \text{ CAUSE } [\beta_j \text{ BECOME } [\beta_j \text{ BE-AT } [\text{UNDER COVER}]]]] \end{array} \right]$

定項である UNDER COVER の部分は同定を受けないので、(4c)が可能であるという予測をするものと思われる。

また、(3a)のメカニズムで形成される複合動詞は、V1 のみを修飾するような副詞による修飾を許す（各組の a が(3a)のメカニズム、b が(3b)のメカニズムによる）。

- (5) a. 太郎はその木をのこぎりで**ぎこぎこ（と）**切り倒した。  
b. \*太郎は妻を**くどくど（と）**言い負かした。  
(6) a. 観客はその芸人を**げらげら（と）**笑い飛ばした。  
b. \*花子は目を**しくしく（と）**泣き腫らした。（由本(2005)では両方とも「手段」に分類）  
(7) a. ?私たちは小船を**ぎいぎい**漕ぎ進んだ  
b. \*私たちは対岸に小船で**ぎいぎい**漕ぎ着いた

(5)~(7)のそれぞれの対比は相対化右側主要部の規則や Lieber (1983)の素性浸透の考え方だけでは捉えられないものであると思われる。

もちろん、(5a)(6a)(7a)の複合動詞は、V1 を修飾する語句に加えて、統語的な主要部を成す V2 を修飾する語句を付加することは可能である。これは、(8)に示す「磨く」のような、様態を含みつつ結果状態も付加できるような語と振る舞いを同じくする。

- (8) a. 太郎は花瓶を**ごしごし（と）**磨いた。  
b. 太郎は花瓶を**ピカピカ**に磨いた。

また、「磨く」も(5a)(6a)(7a)の複合動詞も「\*ごしごしとピカピカに磨いた」「\*ぎいぎい速く漕ぎ進んだ」のように、その動詞の上位事象にも下位事象にも等しくフォーカスの当たるような表現をすることができないことも共通している。さらに上述の「覆い隠す」に関しても、やはり「すっぽりと覆い隠す」(cf. 「\*すっぽりと隠す」)のような修飾表現が可能である。

まとめると、語彙的複合動詞を形成する方法には次の3種類がある。

- (9)a. 2つの LCS を単一融合化して1つの LCS にする(LCS レヴェル)。  
・符号しない意味述語や *manner* をもつ LCS 同士は単一化できない。  
・V1 から項が補充されたり、V1 の意味要素が V2 の動詞の変項の部分に埋めたりして V2 の項構造が変化することがある。  
・V1 の *manner* が複合動詞の相当部分に転写される→副詞による修飾が可能  
b. (9a)が不可能で、V1 が V2 の特質構造の主体役割（影山 (2005)に基づく）に相当すると解釈されうる場合は複合が可能になる（特質構造レヴェル）。  
・ただし、統語的な項の投射は構成役割(LCS)の構造に基づいてなされるため、V1 の LCS 中に V2 の LCS 中と対応づけられない意味要素（項）があれば、その要素は統語構造には投射されない。  
・V1 はあくまで主体役割の地位に留まるので、副詞による修飾を受け付けない。  
c. V2が移動を表し、V1がその移動の様態を表す場合、そこから統語構造上に項が投射されうる。（松本(1998)が分析するように、移動動詞は特殊なものであるかもしれない。移動動詞に関しては今後の課題としたい）。



参照文献

Jackendoff, Ray. (1974) A deep structure projection rule. *Linguistic Inquiry* 5: 481-505.

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房

影山太郎 (2005) 「辞書的知識と語用論的知識」『レキシコンフォーラム』 1: 65-101.

Lieber, Rochelle. (1983) Argument linking and compounds in English. *Linguistic Inquiry* 14: 251-286.

松本 曜 (1998) 「日本語の語彙的複合語における動詞の組み合わせ」『言語研究』 114: 37-83.

Pustejovsky, James. (1995) *The generative lexicon*. MIT Press.

由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』 ひつじ書房

# 構文形態論による日本語動詞複合語の記述

あさおよしひこ  
浅尾仁彦

asaokitan@ling.bun.kyoto-u.ac.jp

京都大学大学院

本発表では、個々の複合語を構文 (construction) の実現形とみなす構文形態論 (Construction Morphology, Booij 2005 他) の視点に立つことで、日本語の複合動詞および動詞由来複合語の適切な記述が得られることを示す。

複合動詞と動詞由来複合語について、理論的視点から包括的な分類を試みた先行研究に伊藤・杉岡 (2002) がある。伊藤らは、レキシコンによる語形成と規則による語形成とを二分する二重メカニズムモデルの立場から、これらの複合語を次のように分類している。

## (1) a. Lexicon

- 付加詞複合語 (手書き, 薄切り)
- 語彙的複合動詞 (取り外す)

## b. Rule

- 内項複合語 (皿洗い)
- 統語的複合動詞 ((雨が降り) 始める)

しかしながら、統語的複合動詞において生産的なのは前項のみであり、後項に立てる動詞には語彙的制約がある (cf. 影山 1993)。これに対して、内項複合語は前項・後項ともに語彙的制約はない。語形成を Lexicon と Rule に二分する方法では、このような区別を記述することができない。

部分的に語彙的制約をもつ表現の記述には、構文文法 (Fillmore et al. 1988 他) の考えが適している。例えば、「降り始める」という語は [[V]-始める / begin Ving] という構文 (形式と意味のペアとして表現される) に「降る」を代入して成立すると考えることができる。この見方に立てば、複合動詞および動詞由来複合語は以下のように分類し直すことができる。

## (2) a. 語彙的

- [飛び込む / dive into], [見つける / find], ..
- [歯止め / ratchet], [秒読み / countdown], ..

## b. 一部が生産的, 一部が語彙的

- [[N]-生まれ / be born in N], [[N]-沿い / along N], ..

- [[V]-始める / begin Ving], [[V]-続ける / keep Ving], ..

c. 生産的

- [[N][V] / Ving of N]

この記述の妥当性は、複合語の意味的・音韻的透明性の観察によっても裏付けられる。透明性に関しても、前項の透明性と後項の透明性は区別される。例えば「泣き出す」は前項は透明だが、単独動詞「出す」には「開始する」という意味はないので、後項は不透明である。これは「泣き出す」が単独動詞「泣く」を構文 [[V]-出す / begin Ving] へ代入することによって形成され、単独動詞「出す」は語形成に直接関与しないとすれば理解できる。

同様に、(2) の記述から、複合語のどの位置で透明性が低下しうるかを予測できる。本発表では、複合語の意味的・音韻的透明性について以下の現象を指摘し、これらがいずれも (2) の記述に合致することを示す。

- (3) a. 統語的複合動詞では 前項 の意味は透明だが、語彙的複合動詞では不透明である場合がある。
- b. 語彙的複合動詞では 前項 は音韻的にも透明だが、語彙的複合動詞では音便化が生じる場合がある。
- c. 複合動詞の 後項 は、統語的か語彙的かを問わず意味が不透明である場合がある。
- (4) a. (生産的な) 内項複合語では 後項 の意味が透明だが、付加詞複合語では不透明である場合がある。
- b. (生産的な) 内項複合語では 後項 が音韻的に透明だが、付加詞複合語ではアクセント型が失われる。

参考文献

- Booij, G. (2005). Compounding and derivation: evidence for Construction Morphology. In W. U. Dressler, F. Rainer, D. Kastovsky, & O. Pfeiffer (Eds.), *Morphology and Its Demarcations*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Fillmore, C. J., Kay, P., & O'Connor, M. C. (1988). Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: The case of *let alone*. *Language*, **64** (3), 501–538.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002). 『語の仕組みと語形成』, 『英語学モノグラフシリーズ』, 16 巻. 研究社.
- 影山太郎 (1993). 『文法と語形成』. ひつじ書房.

## 韓国語受動文と語彙概念構造

和田 学

山口大学人文学部

韓国語の接辞 *hi*(異形態 *i, ki, li*)によって形成される受動文には様々なタイプがあるが、本発表では、(1)の様な例を中心に扱う。

- (1) Ywumi-ka kay-eykey tali-lul mwul-li-ess-ta.  
Y-ガ 犬-ニ 足-ヲ kam-are-ta

(1)の主語が基底生成された**外項**であることを示す経験的な証拠(Park 2001, Wada 2007)に基づくと、(1)は他動詞の構造が受動を表す要素に埋め込まれた複文構造をなすことが導かれる。本稿では、以下の事実に基づいて、この複文構造が(2)の様に LCS で形成されると主張する。

- (2) [x<sub>i</sub> AFFECTED [y ACT ON z<sub>i</sub>]]

1. *hi*-接辞化は生産性が低いことは、語彙部門で接辞化が起こることを示唆する。

2. NPI”*pakkey*~*Neg*”(しか~ない)は同じ節の中になければならないが、(3)は、(1)が統語的に複文構造をなさないことを示す。

- (3) Ywumi-nun kay-eykey tali-pakkey mwul-li-ci anh-ass-ta.  
(Y-ハ 犬-ニ 足-シカ kam-are-nakatta)

3. 語彙的複合動詞の内部に受動形態素が現れる。由本(2005)は日本語の語彙的複合動詞が LCS で形成されるとしているが、これが韓国語にも該当すると仮定すると、受動化後に複合動詞化が起きると説明できる。

- (4) ccoch-**ki**-e na-ta(追われ出る=追い出される)、mil-**li**-e na-ta(押し出される=押し出される)、ppal-**li**-e tul-ta(吸われ入る=吸い込まれる)

4. 接辞 *hi* は受動化の他にも一般的な自他交替にも現れ、受動化と非対格化はしばしば形態的に曖昧である(*kkekk-ta*(折る) vs. *kkekk-i-ta*(折れる、折られる))。自他交替が LCS で起こる現象とすると受動化も LCS で起こっていると考えるのが自然である。

以上に基づいて、(1)の受動文は、(2)の様な再帰的な LCS を持ち、これが項構造に連結されると仮定する。その際、経験者が動作主の上位にあり、一般的な意味階層(*Agent > Experiencer*)に違反することになるが、これを避ける為に動作主は項構造に反映させない過程が働くと仮定する。

- (5) [x<sub>i</sub> AFFECTED [y ACT ON z<sub>i</sub>]]  
(x<sub>i</sub> ↓ ( ↓ ) ↓)

(5)の仮定は、当該の受動文において、動作主が目的節の空主語をコントロールすることができない(Hong (1991))という事実とも合致する。

- (6) Ywumi-nun Chelswuj-eykey [ei/\*j ttal-ul kwuha-lyeko] mok-ul cal-li-ess-ta.  
(Yi-ハ Cj-ニ [ei/\*j 娘-ヲ救ウタメニ] 首ヲ kir-are-ta)

本稿はある種の受動化が語彙部門、殊に LCS でも起こり得ることを示すものである。

参考文献

Hong, Ki-Sun 1991 “The Passive Construction and Case in Korean,” BLS 17, 130-143.

影山太郎 1997 『動詞意味論』、くろしお出版、東京

Park, Sang Doh 2001 “Passive Constructions in Korean,” *Harvard Studies in Korean Linguistics* 9, 640-649.

由本陽子 2005 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』、ひつじ書房、東京

Wada, Manabu 2007 “Re-classifying the Lexical Passives in Korean,” paper presented at 12<sup>th</sup> Harvard International Symposium on Korean Linguistics

e-mail : [wadagaku@yamaguchi-u.ac.jp](mailto:wadagaku@yamaguchi-u.ac.jp)

題目：インドネシア語形容詞派生動詞の語彙概念構造と VP 殻構造

インドネシア語では、形容詞から生産的に動詞が派生する。形容詞に接頭辞 *me-*がつくと「～になる」という自動詞、共接辞 *me-kan* がつくと「～にする」という他動詞になる。たとえば、形容詞 *panas* 「熱い」から、自動詞 *memanas* 「熱くなる」、他動詞 *memanaskan* 「熱くする」が作られる。英語の形容詞派生動詞について、影山(1996)では、形容詞派生動詞は使役他動詞が基本であることが論じられた。インドネシア語でも、他動詞が自動詞よりも広い分布を示している点から、他動詞が基本であると考えられる。さらに、影山のいうように、変化対象が「内在的コントロール」を持つ場合、使役主が変化対象と同定され、「反使役化」によって自動詞が派生すると分析される。

(1) *Matahari memanaskan bumi.* 「太陽が地球を熱くする」

[[x ACT] CAUSE [y BECOME [y BE AT *hot*]]]

(2) *Bumi memanas.* 「地球が熱くなる」

[[~~x=y ACT~~] CAUSE [y BECOME [y BE AT *hot*]]]

「内在的コントロール」と「反使役化」はさらに、*Rambut memanjang.* 「髪の毛が長くなる」は可能だが \**Rambut memendek.* 「髪の毛が短くなる」が非文であること、*senang* 「うれしい」のような心理形容詞は他動詞形のみを持つことなども説明できる。

一方、一部の形容詞からは共接辞 *me-i* により他動詞が派生する。*panas* 「熱い」の場合、*me-kan* 形 *memanaskan* と *me-i* 形 *memanasi* はいずれも「熱くする」というほぼ同じ意味になる。しかし、*me-kan* 形と *me-i* 形は、前者が対象の変化を含意するのに対して後者は必ずしも含意しないことなど、細かいちがいがあある。これは、*me-i* 他動詞は使役動詞ではなく付与動詞であることから説明される。

(3) *Saya memanasi kamar.* 「私は部屋を熱くする (=温める)」

[[x ACT] CAUSE [y BECOME [y HAVE *hot*]]]

*kotor* 「汚い」のような形容詞からは、*me-kan* 形ではなく *me-i* 形が派生する。これは、対象物が本質的に「汚い」状態に変化するのではなく、対象物に「汚れ」を付与すると考えられるためである。また、*terang* 「明るい」のように *me-kan* 形と *me-i* 形がまったく異なった意味を持つ場合も、使役と付与のちがいとして説明できる。

インドネシア語形容詞派生動詞は、*me-kan* 他動詞が生産的であるのに対し、*me-i* 他動詞は生産性が低い。これは、前者が統語的であるのに対し、後者が語彙的である可能性を示唆する。共接辞 *me-kan* からは、使役他動詞だけでなく受益者(benefactive)などの適用態(applicative)構文も派生する。適用態が Baker(1988)のいうように「編入」(incorporation)による統語的操作であるならば、VP 殻構造および軽動詞 *v* を仮定することにより、形容詞派生 *me-kan* 他動詞もまた統語的派生として分析することが可能であろう。

#### 参考文献

- Baker, M. (1988) *Incorporation*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Dardjowidjojo, S. (1983) *Beberapa Aspek Linguistik Indonesia*. Djambatan, Jakarta.
- Hale, K., and S. J. Keyser. (1993) "On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations." In Hale, K., and S. J. Keyser. eds., *The View from Building 20*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- 影山太郎. (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版
- 松岡邦夫. (1990) 『インドネシア語文法研究』 大学書林
- 杉岡洋子. (2002) 「形容詞から派生する動詞の自他交替をめぐって」, 伊藤たかね (編)『文法理論：レキシコンと統語』 東京大学出版会

長南一豪 CHONAN Kazuhide

獨協大学大学院 外国語学研究科 (英語学専攻) 博士後期課程

152-0031 東京都目黒区中根 2-3-10

03(3717)3486

chz28030@syd.odn.ne.jp

チュートリアル講演

## 認知形態論の基本的考え方紹介：用法基盤モデルにおける語形成

上原 聡  
東北大学

認知言語学的なアプローチによる形態論の考え方の紹介として、語や述部の形態・構造が意味機能の動機づけによる言語使用の実際によって形作られる／形成されるという点を取り上げる。具体的には、活用形態の規則性／不規則性と、形態素の順序制約という二つの日本語にも見られる言語現象を取り上げ、多言語の類型論的な研究をもとにそれらの原理を明らかにした **Bybee 1985** や **Langacker 1987** 等を紹介する。それらの原理をもとに、国語学などでも取り上げられて来た、日本語の動詞活用形態の規則性と述部形態素の順序規則に関して、認知形態論の観点からの分析・説明を行う。



発表者氏名： 小竹 直子 (KOTAKE Naoko)・酒井 弘 (SAKAI Hiromu)

所属： 広島大学大学院・広島大学

連絡用メールアドレス： [naokok502@gmail.com](mailto:naokok502@gmail.com)

発表要旨：

形態的に対応する感情動詞と感情形容詞の使い分け  
—「悲しんだ」と「悲しくなった」のアスペクト性を手がかりとして—

人間の感情を表す動詞には形態的に対応する形容詞形を持つものがあるが、これらはどのように使い分けられているのだろうか。従来の研究は、「感情表出」(寺村 1971)、「報告」(金水 1989)、「述べ立て」(仁田 1991)といったモダリティと主語の人称との関わりから捉えたものが多い。しかし、(1)ではモダリティの点で顕著な相違は見られないのに、感情動詞と感情形容詞が使い分けられている。

(1) a. その知らせを聞いたとき、一瞬で わたしは 悲しくなった/?? 悲しんだ。

b. その知らせを聞いてから、3日間ずっと わたしは 悲しんだ/?? 悲しくなった。

このような使い分けには、両者が表現し得るアスペクトの相違が関係していると考えられる。しかし、アスペクトの相違に言及した研究では、動詞にはスルとシテイルのアスペクト対立があるが、形容詞にはそれがなく専ら状態性を表す(工藤 1995, 金水 2000)と、動詞と形容詞単独で使用された場合のアスペクトを述べるに留まっている。これに対し、実例には(1)のように、「悲しくなる」などの複合形式で使用される場合も多い。よって、実際の使用における使い分けの基準を探るためには、動詞と「形容詞+なる」とのアスペクト性の相違を知ることが重要である。そこで本研究では、両者の相違を明らかにするためコーパスの実例分析と調査紙を用いた文完成実験を行った。

日本語コーパス調査では、朝日新聞データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』より、ランダムに「悲しむ」と「悲しくなる」の用例を50例ずつ抽出し、両者の置き換え可能性を分析した。その結果、「悲しくなった」の実例のうち20例で「悲しんだ」との置き換えが困難に感じられ、そのうち15例(75%)は「～と思うと」のように変化のきっかけを表す節に後続していることが観察された。

調査紙を用いた実験では、日本語母語話者を対象に文完成課題を行わせた。実験1では、主語の人称を一人称に統一した上で、後続する文のアスペクトが「変化」と「継続」のどちらかになるよう文脈を与え、述語の直前まで提示された文の断片を完成させるよう指示した。実験2は、主語の人称を三人称単数に統一して、その他は同様の手続きで行った。その結果、一人称主語の文でも三人称主語の文でも、継続条件では有意に動詞形の使用が多く、変化条件では有意に形容詞形の使用が多かった ( $p<.01$ )。

以上、二つの調査を通して、感情の変化の過程を表す文脈では動詞が用いられず、「形容詞+なる」形式が用いられること、状態が継続することを表す文脈では動詞が用いられることがわかった。すなわち、変化文脈では動詞が使用されないことから、感情動詞は変化の意味を含まず、変化が生じた後で結果の状態が固定的に存在することを表すと言える。このような実例の中での感情形容詞と感情動詞の使い分け、及び感情動詞のアスペクト性は、本研究によって初めて明らかにされた事実である。

## 軽動詞構文の LCS と項構造

津田塾大学博士課程 2 年

小林真由美

yukakumi@xa3.so-net.ne.jp

軽動詞の定義については統一見解が得られていないが、Kearns (1988/2002)はこれまで軽動詞構文または **Complex Predicate** と呼ばれてきたものの中で、受動化、WH 移動、定性制限などに関して一般動詞と異なるふるまいを示すもののみを **true light verb (TLV)** とし、一般動詞と同じふるまいをする **vague action verb (VAV)** と区別するという見方を示す。本研究ではこの TLV の定義に基づいて、TLV 構文 *give/have a V* 動詞の原形)における *V* は基体動詞の LCS の一部を取り出したものであり、これを TLV の LCS に定項として埋め込むことにより TLV と *V* とでひとつの動詞の役割をする複雑述語が形成されるという仮説を展開する。Kearns が **main give** と **light give** の統語構造の違いから TLV の文法的特徴を説明しているのに対して、本研究ではこの仮説により LCS の合成という観点からの説明を試みる。

与格交替において TLV は与格形を許さないという特徴をもつが、本研究はとくにこの点に着目し、Jackendoff (1990)の二層構造 LCS と階層的項連結の概念を用いてその理由を解明する。**main give** においても与格形が許されない例があり、その理由について Levin and Rappaport (2005)、Kaga (2007)、影山 (編) (2001)らによりさまざまな説明が成されているが、二重目的語形と与格形に別々の LCS を設定する考え方も含めてこれらの考えも前述のひとつの二層 LCS による説明に集約することが可能である。さらに、Jackendoff (1990)の項の随意的省略(**optional omission of an argument**)の考え方を併せて用いることにより *give a groan* のような二項述語形の項構造も同一の LCS で説明することができること、および、*have a V (of...)* の LCS と項構造にも *give* の上記の考え方を当てはめることができることを提案する。

一方、Cattell (1984)が指摘するように、VAV に属する *make* を用いた構文では、*make* が本来もっていないはずの *to*-与格交替が表れるという現象がある。このような構文は明らかに TLV 構文とは文法的に異なるものの、やはり **Complex Predicate** と考えるべきであり、両者に定性制限という共通点のあることはその証拠のひとつと見ることができる。つまり軽動詞構文と総称されるものは **TLV Complex Predicate**、**VAV Complex Predicate** と、一般の本動詞構文と同様の VAV 構文の 3 つに分類できることが示唆される。

最後に、以上の考えを日本語の軽動詞構文に当てはめてみると、「ひと *V* する」構文と「VN をする」構文との間に、TLV 構文と VAV 構文との違いによく似た文法的相違が見られることを示す。